

第1期ラオスにおける知的障害者社会自立のための生活・就労支援プログラム
事業実施事前写真



事業実施事前写真ラオスで唯一の知的障がい児・者の通所のセンター。ビエンチャンの街の中心から車で10分ほどの住宅地にある。この鉄の門の中に5歳から38歳の軽度・重度、あらゆるタイプの知的・発達障がい児・者が50名朝8時半から午後4時まで1日を過ごしている。地域との連携はほとんどない。ラオスでは知的障がい児が教育から排除されているため親は子供たちの居場所がないことを憂いている。家で子供たちの面倒を見ることしかできていない。そのため、働く親たちがこのセンター設立を願い、当初は親がお金を出し合って小さな運営を始めることからスタートした。

知的障がい者センター(IDU)はラオス障害者協会所属であり、この賃貸物件の一軒家を借りて運営している。賃料はカリタスオーストラリアより支援を受けている。センターにはスタッフは10名。ほとんどがボランティア。親はこのセンターに40万キップ(5000円)の月額支援費を修めている。多くの親が子供の将来を心配しているが、センターで生活する子供たちの社会自立がこのままでは全く進まないのではないかと憂いている。センタースタッフは知的障がい者支援の知識がほとんどなく、見守りのような役割を担っているのみである。



日中活動(事業実施前)

軽度、重度、年齢もミックスの知的障がい児・者が簡易の手工業をしている。慈善事業でセンターの前でクラフトを売るなど団体としてファンドレイジングを行っているが、あまり収益がない。指導者もない状態。ニーズに即した支援はまったくされていない。